

## 報告(5)

### 「社会的包摂と支援に関する基礎的研究」



小泉 義之

(先端総合学術研究科教授)

小泉です。よろしくお願ひします。最初に自己紹介を加えておきますが、私は元々専門は哲学と倫理学です。この数年、福祉国家あるいは福祉社会の歴史を主として研究しています。併せて精神医学、精神分析学、心理学、いわゆるPSY-系の諸学問と実践の歴史を思想史ですけれども、History of ideasということになるんでしょうが主として研究しています。哲学・倫理学と離れて久しいということです。そういうことで皆様とも交流できるかと思っています。それでは発表に入ります。

本事業に関しましては、我々は基礎研究チームといいますが、基礎研究チームの課題とするところを報告いたします。我々の事業はインクルーシブ社会を掲げて大学研究機関と地域市民との連携を掲げています。このような事業を可能にしているマクロな動向を4つほど挙げてみたいと思います。第一に日本では、2000年の介護保険導入以来の動向があります。これは主として高齢者や希少な難病患者や障害者を対象としたものです。その中で医療、保健、福祉の複数の機関、複数の専門職の新たな連携を作り出してきました。その過程で、各種の機関や施設、これが機能分化あるいは再編されてきています。そして、家族や市民の新たな参加が進められてきています。こうした背景には、もちろん介護保険による給付費の増大があります。その給付費は2010年で約7兆円に達しているということです。ちなみに家庭電器製品の販売が年間7兆円だそうですね。大体それぐらいの市場規模になっているそうです。だからどうだという話は措いておきまして、それはさておき、日本では、介護保険の導入が契機となった動向があり、それはおおむね先進諸国の動向と類似していると言えます。そして、その点についての研究や実践は膨大にあります。この発表では、そこで使用されてきた単語だけを、しかも日本語に導入されて使用されている英語だけを拾っておきます。インテグレーション、コーディネーション、コラボレーション、インターセクター、リンケージ、ネットワーク、トランジッション、

トランスレーションですね。これらの単語を聞けば、この動向のおおよその輪郭は皆さんも思い浮かぶかと思いますが。

次に第二の動向ですが、簡単に申し述べますが社会的排除と社会的包摂を巡る動向です。これは主として様々なマイノリティ、少数民族、移民、貧困者、障害者などを対象としています。これに対しても研究や実践は膨大にあります。

それから第三の動向ですが、これは本事業にも多に関係していますが、精神医学や精神衛生、臨床心理、更には司法、法と司法の関係が歴史的に変化してきたということです。これについても多くの研究や実践は膨大にありますが、私の見る限り十分な分析は果たされていないと思います。

それから第四の動向として挙げておきたいのは産業と大学の共同研究です。これは産業と軍事と大学の共同も含みながら、その後産業、行政、大学、民間の共同が進められています。この動向は我々も多に関係しているわけですし、この過程で近年、大学の教育と研究は多に変化してきたと見ることもできます。おおむね、以上のような4つの動向、近年の動向を拾い上げることができると思いますが、ちなみにこれを政治的・政策的にどう表現することができるか、どう把握するかということについては実は議論のあるところですよ。

よく聞くタームとしては、第三の道、新しい公共、あるいは新しい市民社会というスローガンで表現されてきたと思いますが、これも議論をしなければいけないところかと思いますが。いずれにしましても、以上のようなマクロな背景で我々の事業は可能になってきており、その中で位置付いていると思います。その上で我々基礎研究チームは、本事業の各チームの基礎理論を探求することを使命としています。その際に今述べた4つの動向を正確に探求・研究することが前提となるわけですが、そんな課題は我々の手に余りますし、できませんし、そのようなことが実際に求められているわけではないと思います。そこで我々としては、基礎研究チームは各チームの研究にまさに伴走しながら、そこで何が行われているのか、何が起きているのかをよく観察することを第一の課題としたいと考えています。この点を少し一般化して述べるなら次のようなことになるかと思いますが。今、各種機関や施設、専門職、家族、市民の関係を一応、連携という言葉で代表させておきます。その連携について、我々が問うてみたい、あるいは私が問うてみたいのは次のようなことです。3つほど挙げておきます。第一に連携が全体として目的としていることは何なのか、ということですよ。翻ってその連携のもとで各種のアクターが目的としていることは何

なのかということです。これは、素朴な問いに聞こえるかもしれませんが、今こそ明示的に問い直されるべき問いであると思っています。第二に連携が全体としてどのように機能しているのかということです。このことはもちろん、それこそ成果、エビデンス、評価法をめぐる膨大な議論に関係することなのですが、それとは少し区別される問いかと思います。実際にどのように機能しているかという問いですね。それから第三の問いとして、その連携のもとにそこに参入している諸々のアクターがどのように変化してきたのかということです。私が見るところ、端的に言いますと、各種の機関、各種の専門家の職務内容とか職務範囲、職業倫理は明らかに変化してきていると思います。いずれにしても以上のような3つの問いを掲げてみますが、3つの問いは基本的には事実に関する問いです。何が目的・目標として目指されているのか、何が実施され機能しているのか、何が起きているのかを正確に観察するという課題です。そして最後に以上の3つの問いを倫理的な問いに言い換えておく必要があると思います。すなわち、第一の問いだけを言い換えておけば、我々は連携ということで何を指すべきなのかという問いになります。あるいは連携に参加する専門家、研究家が何を指すべきなのか、改めて何を指しているのか、あるいはどのように機能すべきなのか、どのように変化すべきなのか、そういった問いが改めて立てられるかと思います。以上簡単にマクロな動向を背景とする本事業における我々のチームの問題意識を述べましたけれども、我々のチームでも既に具体的に進めてきた研究や実践は継続していますので、それを併せながら皆さんと協力してプロジェクトを進めていきたいと思っています。どうもありがとうございました。

**稲葉** 小泉先生、どうもありがとうございました。